



TITLE:

青盛和雄著「人口學研究」を読む

AUTHOR(S):

山岡, 亮一

CITATION:

山岡, 亮一. 青盛和雄著「人口學研究」を読む. 經濟論叢 1944, 58(5): 655-663

ISSUE DATE:

1944-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/132093>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號五第卷八十五第

叢
報

資本稀少税を中心として……………高田保馬

ヒックスの利子理論……………青山秀夫

效用漸減の法則と其系に就いて……………有井治

マーシャルの消費者餘剰に就いて……………嶋津亮二

アンシアン・レジームの農業構造……………河野健二

日清戦後經營と農商工高等會議……………堀江保藏

青盛和雄著「人口學研究」を読む……………山岡亮一

行發月五年九十和昭

青盛和雄著

「人口學研究」を讀む

山岡 亮 一

本書は著者が故財部博士の下で人口理論の研究に着手せられてより十幾年文字通り生死と移住の問題を人口統計學の中心命題と考へそれに自己の生命を打込んでの精進の生活から生み出された貴き努力の結晶である。ここに收録の一聯の論文中には既に學界より高く評價されてゐたものもあるが、今回幸ひにして理解ある出版者の手により刊行のはこびとなり、前後脈絡のついた形でわれわれの前に提示せられ、その結果人口學建設の熱情に燃える著者の企圖せられる人口學の體系、構造がその全姿を明かにしたことは學界を裨益するところ洵に大なるものありと信ずる。こゝに主として取り上げられてゐる人口學の二大課題、生死と移住との問題、即ち具體的には都鄙人口周流の問題と男女

青盛和雄著人口學研究を讀む

別出生の問題はまことに古くして常に新しき問題であり、諸外國は勿論我國に於ても既に學界の屢々取り上げ來つたところであるが、しかもその解明し得たところは必ずしも眞に科學的に十全たるものではなく著者をして靴を隔てて痒をかくの嘆を感じしめたのである。元來學問はいささかの當込みや打算があつては成立たぬものであることは述べる迄もないのであるが、著者は特にその序文に「最初から何等の豫定せる結論はあり得よう筈もなく」と述べてその中正にして眞摯なる學的立場を堅持せられてゐるのは最近急にあらはれ始めた人口問題研究に共通のやうに見うけられる安易なる人口増加禮讚論や人口農本主義的田園禮讚論或ひは又大都市辯護論の情熱過剩症狀のため事實を冷靜に認識し、都鄙兩者を有機的一體として理解するの餘裕を失つた結果として、第三者より見るときは徒らに時事問題に大言壯語する人々と比し、快き爽かさと深き感銘をあたへるものと言ひ得られるのである、それは愛國的情熱を奥深く藏しながら、しかも冷靜なる科

學的態度を保つ著者の人となりの現はれに外ならぬと思惟せられる。

二

本書は理論的學說史的部分よりなる前編と統計數値による應用的檢證の部分よりなる後編とにより構成せられる。前編に收むるところは、第一章、近代獨逸の人口論者ハンセンの著作「人口の三序」解題、第一節、前世紀末葉の人口論者ゲオルク・ハンセンの略傳、第二節、ハンセンの人口理論に就て、第三節、ハンセンの人口政策に就て、第四節、本邦に於けるハンセンの人口學說史的回顧、第二章、近世普國の人口學者ジユースミルヒの「神的秩序」解説、第一節、ヨハン・ペーター・ジユースミルヒの生涯、第二節、ジユースミルヒの人口學觀、第三節、統計學史上に於けるジユースミルヒの地位。後編に收むるところは、第三章、都市人口周流理論の研究、第一節、來住と大阪市人口構成、第二節、東京市に於ける人口増加の意味、第三節、本邦内地大都市人口の再生力に就て、第四節、都市及農村人口の自然的繁殖力に就て、第四章、本邦に於ける出産現象の性別秩序に就て、第一節、戦時出生の男女別、第二節、出生男女別の統計的研究、第三節、出産統計に於ける季節的變動。

以下順を追ふてその内容を紹介しよう。著者は先づ

既往のハンセン説紹介に於ける原著者に對する無理解を指摘し、新に發見せられたる略傳を記述して之と著作との關係を明かしむることにより今まで暗黙裡に葬り去られてゐた著書の運命を打開し云はば新解釋の下に見直さんとの試みから出發せられる。粗野な言葉ではあるが何處の馬の骨かわからぬ人間の所説はこれを眞面目に受取るにかなりの勇氣がいるのは人情であらう、この意味に於てもハンセンの傳記の不詳はたしかにその人口論の普及を妨げて來たことは疑ひないのである。著者が簡單に述べられるハンセンの略傳も、その發見には他の想像も及ばぬ骨折りの存することを忘れてはならない。數年間に互る努力が報いられて「全く五里霧中に迷へるかの如きハンセンの略傳が全く偶然にも一九一一年の著明物故者履歷を掲載せる唯一冊の本から發見せられた」ことは我國人口學界のためにまことに大なる喜びと云はねばならぬであらう。著者のハンセンに對して捧げられた敬愛の衷情は「蓋しハンセンなる人物は内面的には稀有の深味を

湛へ乍ら、外面的には何等の粧ひも見せないと云ふが如き宗教家の一典型を偲はしむるものがあり云々」なる言葉の中に餘すなく表現せられてゐるが、かやうなハンセンへの深き理解が存してこそ、彼に對する正當なる認識が期待せられ得るものと考へられる。著者はかゝるハンセンへの深き理解の下に次にその人口理論の要旨を其の源泉に於いて考察せられてゐる。その目的とせるところは現在尙進行中の一國人口の都市化過程が國民の文化に及ぼす影響を道破せるハンセンの所謂の人口周流なる一經驗法則に注意を喚起するにある。著者によれば過去に於てハンセンの説は多くはその批判者たるクチンスキーを通じてのみ論究せられた形跡があり、従つてハンセンの「都市人口の増加が來住のみに歸せられる場合に自力のみに依つては人口は停滯を續けるであらう」なる命題も一旦之を傳承したる人々に於ては遠慮なく一般化せられて、來住が停止したる場合には都市人口は死滅するといふ命題として論議せられるに至るのであつて、かゝる誤れる一般化

に對する訂正要求もこの論文の重大使命と稱すべきであらう。人口理論は人口政策と有機的聯關を有することはいふ迄もない。著者はつづいてハンセンの人口政策をとり上げ、著作禮讃のみに終始せざるやう適宜に反對者の所論を参照しつつ慎重なる態度を以て正當なる評價をあたへんと試みられる。先づ原著者の死後その復刻版を發行せるクレマー教授の序文に對し、我國の學者が一人ならず双手をあげて同感する農本主義的思想が餘りにも情熱過剩的症狀を逞するの故に、その農本的ハンセン解釋を斷乎と拒否し、而してハンセンの著述を農民と市民と勞働者と共に率直にして公平なる水準線を維持するもの、換言すれば夫々の人口階層の國民經濟的重要性を意義づけるものと見るところのロツシュの言葉に左袒される。著者に於てはハンセンの人口理論に裏付けられた人口政策の必然的結果として、移住の自由が強調せられるのであるが、蓋し都市人口は自力のみでは維持發展は困難であり、農村人口によつて之を補給する必要よりの當然の歸結といふべ

きであらう。第一章の最後の節は「我國に於けるハンセンの人口學說史的回顧」であるが、こゝでは我國のハンセン學者と稱せられる人々が一々祖上にのぼされ、克明な文獻學的考察によつて從來のハンセン學說への理解が如何に歪められ、誤られ來つたかが白日に曝されてゐる。終りに著者の崇敬せる恩師故財部博士の明治末年に於ける斯說紹介の先驅的著述を見出したる喜びを吐露される。師弟二代にわたる人口學建設の熱情はハンセンへの深き理解を中核として著者と恩師との詩の中に流れてゐるが、そこに見られる師弟の情の美しさは師弟道廢れたる今日蓋し學界に清新の氣を注入するの効果を有つものであらう。

第一章に於て我々はハンセン人口論に對する立場を通じて著者の眞摯なる學問的態度に接し得たのであるが、第二章に於てはこれを再確認し得ると同時に著者の抱く人生觀宗教觀とも稱すべきものをもうかがひ得られる。先づ第一節に於ては主としてヨーンに依りつゝジューズミルヒの生涯が詳細に語られる。ジューズ

ミルヒが現代日本に於て問題とせられる所以のものは戰時下の人口政策が云爲される限り必ず叫ばれる聖書からの引用語「生れよ殖えよ」を初めて學問的に説明せる人物であるといふ事實と、我國諸學者の彼に對する無理解は上述のハンセンに就てと同様なるに存する。

第二節に於てはジューズミルヒの人口學觀と題して彼の有名なる「神的秩序」の解題が試みられてゐる。著者は曰く「所謂人口史、人口統計理論、人口政策なるものを總括せる人口學なる科學部門が樹立され能ふとすれば彼こそ最初の人口學者たるの名に値する」と。以下しばらく著者に從ひ「神的秩序」の内容に觸れよう。ジューズミルヒが同書中に解明せんと欲したのは次の五ヶ條に要約せられる、即ち（一）婚姻當り出産力、（二）當該死亡率に秩序性あることは其の比率相互間に關係あること、（三）出生の死亡に對する超過、從つて、（四）人口増殖と倍加の起り得ること、其故に（五）地球上のあらゆる地域に於て漸次に人類の充滿が期せらるべきことである。しかも想起すべきは現代人にとつて

は殆んど自明の如く思はれる出生超過の事實でさへもこの未開なりし人口統計分野に於ける最初の開拓者にとつては出生超過の確認といふ嬉ばしき發見に外ならぬことである。

これにつづいて著者は現時關心の中心たる戰時に於ける出生男女別の秩序の擾亂に就いて彼の所説の一端を研究し「彼の生死均衡の人口觀と一夫一婦制を維持すべき男女別割合の恒同性とは、男性の戦死を女性の死亡増加で補ふよりも寧ろ出生に於ける男兒超過に神の攝理を認めしめるに至つたのである。斯の如く死亡の空隙を出生で補填するとの思想は或は宗教的根據に求められるのであらうか頗る興味深き問題である」と述べられる。著者の見解によればわれわれは男兒出生が多いから男性はより多く生存すると同時により多く死亡せねばならぬとの必然的因果關係を確認すべきであつて、決して男兒出生の超過を女性死亡の増加によりて男女の性別比例を均衡せしめる要はないのである。かくて著者の人口學建設の礎石としてのジュース

ミルヒの研究は餘りに神學的と誤解され過ぎてゐた「神的秩序」の中から獨斷的な神學觀を辨別することに集中され、これより獲られた結論は新しき學問としての人口學の對象として「人口現象を貫く法則を見出すがためには、そこを人間の意志自由と不自由との限界が存することを確然と認識すべきであつて、例へば幾時出生に於ける男兒の比較的に超過せる事實でさへも決して神慮の左右し得ざるものなることを知らねばならぬといふにある。著者はかゝる觀點に立つてはじめて眞に科學性を賦與せられた人口學の樹立が企圖され得るし又われわれにかゝる希望を達成せしむると論じてゐる。

第三節に於ては主としてクラムに依つて「神的秩序」の解題が試みられる。本論文の目的は表題の示す如くジュースミルヒの統計學史上の地位を明かにするにあるが、副目的としてはジュースミルヒの所謂神學的なる傾向を社會統計學的なる道統の本流に呼び戻すことがねらはれてゐる。特記すべきは著者の世の評論家達

に比してジュースミルヒの神學的方向に對する甚だ同情的な態度であつて、神の秩序の全體を通じて科學的見地よりする最大の缺點はその神學的方向にあることは明かに承認せられ非難せられながら、この缺點でさへ、若し彼が牧師として經濟や政治の問題に客喙するに就て何等かの尤もらしい口實を備へ附けねばならぬと感じてゐなかつたとしたらこんなに多くの頁を神學的考察に割くことを敢へてしなかつたであらうと云ふクラムの意見に同意を示し、且つジュースミルヒにあたへられたる學者の多くの非難に辯護の勞を費される。

要之「神の秩序」に對する評價としては「それは人口統計學の文獻に於ける一の重要な貢獻と見做されねばならず、云はば人口の靜的狀態と動的變化とに關聯して幾多の相錯綜せる問題を含み得る事實に就ての最初に於ける組織的な摘要たるの地位を占めるものなる點」に意義が認められるのである。著者の立場よりすれば初版を全く改訂せる再版を執り上げながら其の標

題の故に徒に生半可なる神學觀のみをジュースミルヒに結びつけることはあまり妥當ではあり得ぬし、さればとて遂にジュースミルヒの人口學から神學的ものを絶對的に辨別するには頗る慎重なる態度によるあたにかき理解が要請せられるのであつて、寧ろ人的なるものに神性を見出すべきであるとの見解を持たれるのは著者の學立場よりする當然の歸結と見るべきであらう。

以上前編に於て著者は貴重なる二つの外國文獻を通じて文字通り故きを温ねて新しきを知り以つて新しき時代に即應せる新しき學たる人口學の建設に邁進せられてゐる。われわれは著者の人口學の體系が尙一層整備せられんがために引續いての學史的考察の成果を期待するものである。

三

次に後編に於ては先づ「來住と大阪人口構成」がとり上げられ、ハンセンの前掲書に使用せられた統計方法を一顧することを以て現代日本人口論への一階梯を踏み

しむる所以なりとの見透しの下に大阪市の人口に一例をとることによりハンセン説の妥當なる程度如何の検討を試み、左の結論を得られる。即ち「凡そ如何なる人口事情存するかは時と處の相違に従つて自ら變化あり、普遍的なる人口變動の法則は發見しがたいであらうが、少くとも茲に問題とせるが如き大都市人口なるものは、大約半分の原住民と残り半分の來住民とより成り立ち、市民は平均的に二世代の間に於て全く更新せしめられると見做され得よう」と。從來都市人口問題が人口の自然的周流のみに局限され、都市人口成立の本源たるべき社會的周流を忘却せるに對し著者はこゝでハンセン説の諸假定を統計で埋めて實證し以て從來の研究に對し向上進歩の方向を指示したのである。かゝる眞摯なる行方に十二分の果實を結ばしめるには國家、地方官廳並びに都市に於ける統計局課の協力と移住統計方法の發展にまたねばならぬところ大なるものがある。

第二に來住人口統計の批判が行はれ昭和十年度の東

京市國勢調査統計書中の所謂來住人口なるものが主として俎上にのぼされる。こゝでも都市人口に關する議論を明確ならしむべく移住の動態的記錄の整備の必要が強く要望せられてゐる、けれどもこれが差當り望み薄であるとするれば、國勢調査の如き靜態統計に動態的意味を見出すためには、原住者と來住者とに辨別せる都市人口の年齢構成圖の達觀こそ許されたる最上の方策といはねばならぬのである。東京市來住人口統計の批判を熟讀されるならば統計數値の取扱が如何に透徹せる頭腦と徹底せる究學心とを要するかが肝銘せられることと信ずる。

第三の問題は「本邦内地六大都市人口の再生力に就て」であるが、こゝでも著者は極めて中正であり、單なる大都市辯護論を主張したり、農村に復歸せよとの田園禮讃論を宣傳せんとするものでもない、要は都市と農村とに共通なる立場に於て兩者を融和せしめ、國家總力への都鄙住民の一致協力を計るにある。本論文の主要内容は本邦六大都市人口の出生率、死亡率の推

計比較方法、最近に於ける有配出生率と特殊死亡率の測定並に大都市人口繁殖率による自然的再生力の算定よりなり、收録論文中最近時の勞作に屬し長年にわたる思索の結果であり従つて最も圓熟せる論文の、なりと思料せられるのであつて特に讀者の味讀が期待せられる。

かくて良心的なる統計數値の驅使による論證の結果は「決して一部の論者の稱するが如く大都市は農村の墓場なりとか、都會人の繁殖力は情ない程低く、都會育ちの第二世は一層脆弱であるとして都市當路者をして何等政策の施し様もないものと憂慮せしめた程にひどくはないことが」判明した。われわれは著者と共に都市人口の妊孕率の比較的なる最近年次に於ける恢復が近き將來に於て指摘されることを切望して止まぬ。

次の論文は上述の論文のいはば母體をなすものであり、上述論文はこの論文の理解の上に立つてはじめて眞の解明が可能なのではないかと考へられる。こゝでは獨逸のバロツド氏の著書と水島氏の論文とを比較對

照することに問題を限つてその眞に新しき展開に資せんと企圖されるのである。ところがこれらに對する批判は徒らに銳利なる切味を食ふことを止め、寧ろ眞にハンセン的なる都鄙間の人口周流こそ問題なりと看、其爲にはあくまでも移住自由の原則を基準に採るべしと主張せられる。

最終章に於ては「本邦に於ける出生現象の性別秩序に就て」論ぜられる。著者はこゝで出生男女別研究なる一の手がかりを通じて科學的なる人口學の建設に僅少なりとも貢獻せんことを期待される。はじめの二つの論文では「生れよ殖えよ」といふジュースミルヒの主張の根底に存する戰時出生男女別の秩序なるものは、出産男女別の秩序として再確認される。ジュースミルヒの意味するところは男兒のより多く生れる事實が死産及び乳幼児死亡の男兒超過と密接に結合せしめられて考へられてゐる。即ち戰時下日本の出生現象に於ける男兒超過の原因は死産率の低下、並びに死産性比の男兒超過度合の減少が出生性比の男兒超過を結果する。

點に求められるのである。第三の論文に於ては「出生と死産とを含む出産現象に於ける季節的變動が或は出生子の男女別に關聯ありや」が検討され、次に嫡出と私出とを區別せる場合に如何なる時候に於て婚姻外の男女關係が起るかについて説明せられ、最後にかゝる出産の事實より溯及計算すれば四季に於ける本邦の妊娠能力には如何なる消長ありやを測定することが企圖せられてゐる。かくて出産頻度より人類の受胎に於ける規則的な季節的變動の秩序が觀察せられ得又婚姻外の出生から見た妊娠の頻繁率と出産より推計せる妊娠能力との季節的變動に存する比喩的な逆比例の關係が意義深い問題を提供することを指摘される。しかしながらこれからただちに獨斷的な結論を導出することにはあく迄も慎重であり、著者の態度はこゝでも極めて科學的であるといふべきである。尚終りに補論として「ジュースミルヒまでの都鄙人口周流理論に就て」「支那事變と人口問題」「戰時人口政策の基準」の三論文が收められてゐて、それぞれ著者の日頃包藏せ

る人口政策に對する見解が端的に述べられて誠に興味深いものがある。

四

要之、本書は人口問題を言葉通り眞摯に究明せる著書であり、人口問題の認識の仕方を教へると共に人口學の進むべき道を提示してゐる。その中には僅少の曖昧さも存在を許さぬ程の自他に對する峻嚴さが要求されてゐながら、しかも全體を通じて晴明ともいはるべきある若々しい和やかさが溢れてゐる。人口問題研究の重要性の愈々昂まりつゝある秋、人口學を專攻せる學究のみならず、人口問題に關心をよせる世の多數人士の一讀を希望してやまぬ。